287－1

【取扱い厳重注意】

平成２３年１０月１４日

聴　取　結　果　書

東京電力福島原子力発電所における事故調査・検証委員会事務局
局　員　齊藤　修啓

平成２３年１０月１３日、東京電力福島原子力発電所における事故調査・検証のため、関係者から聴取した結果は、下記のとおりであるので報告する。

記

第１　被聴取者、聴取日時、聴取場所、聴取者等

１　被聴取者

東京電力 福島第一原子力発電所 防災安全Ｇ　佐藤 真理

２　聴取日時

平成２３年１０月１３日午後３時００分頃から同日午後４時５０分頃まで

３　聴取場所

Ｊビレッジ広野別館

４　聴取者

齊藤 修啓

５　ＩＣレコーダーによる録音の有無等

☑　あり

□　なし

第２　聴取内容

別紙のとおり

被ばく限度量（5mSv/3ヶ月）を超えた経緯等について

第３　特記事項

[redacted]氏と一緒にヒアリングを実施。

１．の質問事項については、GMら３人が同席。

佐藤真理氏に免震棟の見取り図（別添）を描いてもらい、それを見ながら聴取。

以　上

【取扱い厳重注意】

別紙

1．被聴取者の身分について

私は、震災当時は福島第一原子力発電所（以下「1F」という。）の防災安全グループに所属していました。私は、昭和 56 年に東京電力に入社し、20 年程度の間、広野火力発電所で、発電、燃料、水処理、廃棄物処理等の業務を行っていました。その後、福島第二原子力発電所（以下「2F」という。）の管財部に異動し、組織編制を経て、消防も担当する総務部に所属することとなりました。3 年程前には、1F の総務部で消防を担当するようになりました。現在年齢は 50 代で、眼鏡をかけており、煙草は吸いません。

2．震災後の状況について

私は、免震棟に滞在していた 11 日から 15 日までの間は、主に消火班の手伝いを行っており、2 階の緊対室か 1 階の免震棟出入口近くの消防詰所にいました。消防詰所にいる時間の方が多かったと思います。

私は地震が起こった時には、事務本館の自席にいました。私は防災安全グループに所属しておりますので、地震後にすぐに、事務本館にある放送室に緊急放送をかけに行きました。放送室は、吊り天井が落ちているような状況でした。揺れが収まった後、GM と一緒に拡声器を持って、事務本館の中で逃げ遅れた人に対して、声を掛けて回りました。また、食堂のガスの元栓が閉まっているか確認に行きました。免震棟前に行くと多くの人が集まっていて、緊急要員は緊対室に入るように言われました。この頃は、1 ～ 6 号機があるエリアから避難してくる作業員も多く、また南側にある企業棟に向かう人や、事務本館に戻る人等もいましたので、免震棟に誘導するようにしました。2 階の緊対室に上って、消防署や本店に連絡をしたこともありました。地震の後、30 分から 1 時間後だったと思いますが、津波が来ました。現場とは、警備用に許可をもらって使っている無線を使って連絡を取り合っており、冷却用の水がなくなりそうだということだったので、消防自動車から防火水槽等の水を送る準備を徹夜で行いました。私は、1F 内の防火水槽の位置等に関する知識がありましたので、免震棟の中から現場に指示を送っていました。ただ、夜中頃までは、現場も物が散乱しており、あまり有効な活動は出来ていなかった印象です。消防署との間の専用電話は、夜中の 3 時か 4 時くらいまでは繋がっていましたが、その後繋がらなくなってしまいました。

12 日の朝、免震棟入口のすぐ脇にある消防詰所にいた時に、菅総理が入ってくるのを見ました。その頃、自分は水の調達について検討していたところでした。15 時頃に 1 号機の爆発があった時も、詰所にいました。爆音と衝撃波が物凄く、外には灰のようなものが降っていて、私は 2 階にいる GM に報告しました。14 日の 3 号機の爆発の際にも詰所にいました。この後、消防業務について委託している南明興産から、線量が高くて人を出せないという連絡があり、社員がやるしかないと思いました。21 時頃には、2F に避難する準備をするよう指示がありましたが、結局避難の指示はありませんでした。翌日の深夜 0 時頃には、物揚げ場で消防車の給油の必要が生じ、2 時間程、給油の作業を行いました。線量は分かりませんでしたが、撤収準備の指示がかかっていたことや周囲の切迫した雰囲気から危なそうだと感じ、死ぬかもしれないと覚悟しました。自分は 40 歳以上であり必要ないと言われていましたが、安定ヨウ素剤をもらいに行って、2 錠飲みました。装備は、

全面マスクにタイベックスーツを着ました。なお、もしかすると緊張のためなのかもしれませんが、安定ヨウ素剤を飲んだ後にお腹が痛くなったので、それ以降は安定ヨウ素剤は飲んでいません。飲んだのはこの一度だけです。

15 日の午前中に、円卓の人達 50 人位を残して、みんなで 2F の体育館に退避しました。その時は土砂降りの雨だったのを覚えています。個人の車を動かせる人は、できるだけ乗り合わせて、また企業のバスも借りて移動しました。翌朝、9 時頃には J ビレッジに行って、入退域管理の拠点を作る手伝いをしました。この日の夜、広野の自宅まで、震災後初めて、歩いて帰りました。16 日は J ビレッジに出勤しましたが、1F の中の人は顔も歯も洗えず、着替えもできない惨憺たる状態だということが分かっていましたので、翌日には 1F に電話し、必要なものを聞いた上で、J ビレッジに置いてある物品をできるだけ持って、土木の人の車に乗せてもらって、1F に向かいました。その後、23 日までは 1F で勤務しましたが、3 号機から黒煙が上がったのを機に、女性は 1F から退避するよう指示が出たため、その後は 2F や J ビレッジで勤務しています。

３．1F での女性の勤務について

震災時、1F 内に東電社員は 1000 人弱いたと思いますが、そのうち 100 人程が女性だったと思います。また、協力企業でも 100 人程の女性がいたと思います。緊対要員の中で、女性は 10 人程度でした。緊対要員以外の女性は、退避指示が出るよりも早い段階で帰っていたと思います。緊対要員の中で、免震棟の 1 階に拠点があるのは、消火班の消防詰所、医療班の医務室、放射線班の詰所があります（別添参照）。消防詰所にいた女性は、私だけでした。医療班には、2 人女性がいて、その中に、今日一緒にここに来ている[redacted]さんがいました。放射線班の中に女性がいたかどうかは、分かりません。

４．被ばく検査の経緯について

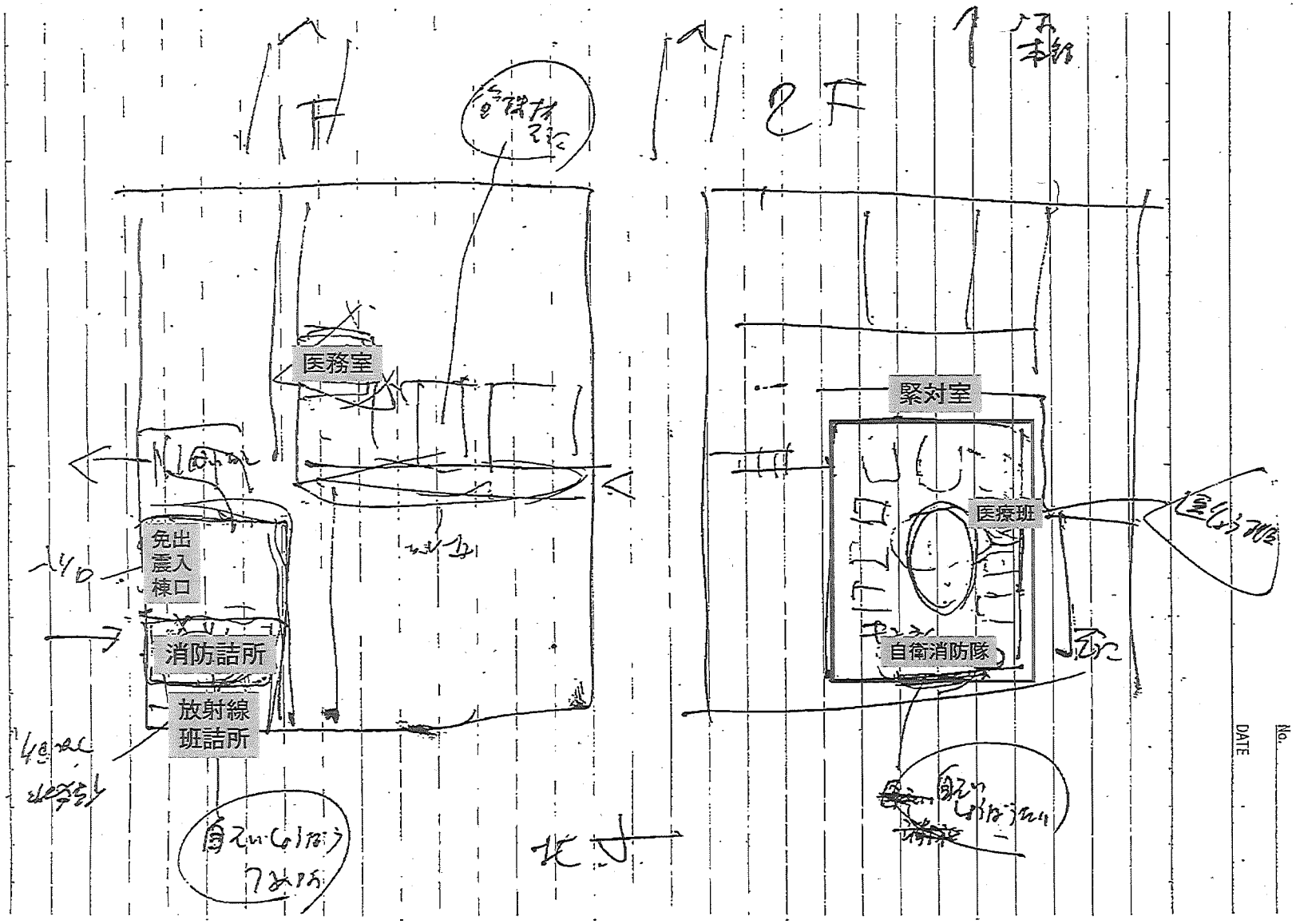
4 月 17 日か 18 日に 2F に出勤した際、2F の WBC（ホールボディカウンタ）が直ったというので、受検してみたところ、内部被ばくの値が高かったと言われ、精密検査を受けるために東海村の JAEA に行きました（検査の結果、内部と外部と合わせた線量は 17.55mSv）。放医研では検査を受けていません。産業医からは、この値では健康への影響はないと言われました。

５．緊急業務の認識について

自分が行っているのが緊急時の作業であるということはもちろん認識していました。仕事を選んでいる状況ではなく、死んでもやらなければいけないという認識でした。

６．被ばく線量が高くなった心当たりについて

消防詰所は免震棟出入口のすぐ近くにあり、他に女性で入口付近に常駐していた人はいなかったと思います。また、免震棟に入る前の汚染検査で汚染が見つかった人については、水がたっぷりあれば除染できたのでしょうが、タンクの中の水を使い果たした後には、十分な除染が出来ない人が免震棟の中に入ってきたことも免震棟内の線量が上がった一因だと思います。



No.

DATE